

ごあいさつ

詩人、萩原朔太郎(1886-1942)。その詩の鮮烈なイメージとリズムに教科書などで出会い、衝撃を受けた人も多いことでしょう。朔太郎は世田谷に建てた家で晩年を過ごし、ここで亡くなりました。当館では2011年に萩原朔太郎展を開催していますが、没後80年にあたる本年、全国で横断的に開催される「萩原朔太郎大全 2022」の一環として、新たな視点からこの不世出の詩人に迫ります。

代表作『月に吠える』の序文に、「人は一人一人では、いつも永久に、永久に、恐ろしい孤独である」と書いています。近代日本のもっとも偉大な詩人の一人である朔太郎は、きわめて孤独な寂しい人物でもありました。学校に居場所がなく、本や音楽を通じて未知の世界に憧れた少年期から、故郷を離れた東京での家庭生活が崩壊し、再び帰郷を余儀なくされた成年期まで、朔太郎の人生には寂しさの影がつきまっています。40代後半に居を構えた世田谷でようやく人との交際を楽しむようになる一方、自身の孤独な経験を近代の日本と近代詩の歩みに重ねた数多くのエッセイや評論を執筆しています。

本展では、朔太郎の生涯と遺された資料、さらにその孤独な世界を新しい形で表現した現代のアーティストたちの作品などを、一冊の「本」を読み進めるように辿っていきます。先の引用箇所が続けて朔太郎は、人間同士に共通するものを発見するとき、「我々はもはや永久に孤独ではない」と書いています。本もまた、孤独な読書を通じて、時代を超えて多くの人間を結びつけるものといえます。どこか寂しげで偉大な詩人、朔太郎の詩や言葉を深く味わっていただければ幸いです。

本展開催にあたり多大なご協力を賜りました水と緑と詩のまち前橋文学館、ご出品いただいた作家の皆様をはじめ、多くの皆様のご厚情に心より御礼申し上げます。

2022年10月

公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館